

# 私は懷疑派だ

二葉亭四迷

青空文庫



私は筆を執つても一向気乗りが為ぬ。どうもくだらなくて仕方がない。「平凡」なんて、あれは試験をやつて見たのだね。ところが題材の取り方が不充分だったから、試験もとうとう達しなかつて了つた。充分に達しなかつたというのは、サタイアになつたからだ。その意つもりではなかつたのが、どうしても諷刺になつて了つた。

「其面影」の時には生人形を拵えるというのが自分で付けた註文で、もともと人間を活かそうというのだから、自然、性格に重きを置いたんだが、今度の「平凡」と来ちや、人間そのものの性格なんざ眼中に無いんさ。丸ツきり無い訳ではないが、性格はまア

第二義に落ちて、それ以外に睨んでいたものがある。一言すれば、それは色々の人が人生に対する態度だな……人間そのものではなくて、人間が人生に対する態度……という何だか言葉を弄するような嫌いがあるが、つまり具体的の一箇の人じゃなくて、ある一種の人が人生に対する態度だ、而してその一種の人とは即ち文学者……必ずしも今の文学者ばかりじゃなく、凡そ人間在って以来の文学者という意味も幾らか含ませたつもりだ。だから今度の作では那樣そんな関係ばかりを眼に見っていて、人間を活躍させようなんぞという気もなけりや、従つて活躍もしなかつた。これが「其面影」と「平凡」とを創作した時の、私の態度の違いさ。

だが、要するに、書いていてまことにくだらない。子供が戦争いくさ

ごツこをやツたり、飯ままご事をやる、丁度そう云つた心持だ。そりや私の技倆が不足せいな故もあるうが、併しどんなに技倆が優れていたらからつて、真実ほんとの事は書ける筈がないよ。よし自分の頭には解つていても、それを口にし文にする時にはどうしても間違つて来る、真実ほんとの事はなかなか出ない、髣髴として解るのは、各めいめい自分の生涯を見たらばその上に幾らか現われて来るので、小説の上じや到底偽うそツぱちより外書けん、と斯う頭から極めて掛つている所があるから、私にや弥いよいよ々真劔にやなれない。

併しながら、斯う云うと、私一人を以て凡ての人を律するようになられるかも知らんが、そう云う心持でもないんだ。私一人がいけないんだね。ただ自分がそういう心持で、筆を持つちやどう

しても真劍になれんから、なれるという人の心持が想像されない。真の文学者の心持が解らん。だから真劍になれるという人があれば私は疑う。が、単に疑うだけで、決してその心持にやなれぬと断定するまでの信念を持つてゐる訳でもない。雖然けれどもどう考えても、例えば此間盜賊に白刃はくじんを持って追掛けられて怖かつたと云う時にや、其人は真実ほんとに怖くはないのだ。怖いのは真実ほんとに追掛けられてゐる最中なので、追想して話す時にや既に怖さは余程失せてゐる。こりや誰でもそうなきやならんように思う。私も同じ事で、直接の実感でなけりや真劍になるわけには行かん。ところが小説を書いたり何かする時にや、この直接の実感という奴が起つて来ない。人生に対するのが盜賊に追われた時の心持になつて了う。

議論から考えて見ると、人生というものが何も具体的にそこに転がっている訳じゃない。斯うやって御互に坐っているのも亦人生に漬かっているのだから、人生に対する感を持たれぬという筈もない。だから追想とか空想とかで作の出来る人ならば兎も角、私にやどうしても書きながら実感が起らぬから真劍になれない。古い説かも知らんが私の知ってる限りじゃ、今迄の美学者も実感を芸術の真髄とはせず、空想が即ち本態であるとしている。この空想とは、例の賊に追われたことを後から追懐する奴なんだ。そうすると小説は第二義のもので、第一義のものじゃなくなつて来る。否いや、小説ばかりじゃない、一体の人生観という奴が私にや然う思えるんだよ……思えると云うと語弊があるが、那樣そんな気がするのだ。

どうも莫迦ぼか々々ぼかしくてね。だから作をする時にや、精神は非常に緊張させるけれども、心には遊びがある。丁度、擊劔で丁々と擊合つては居るが、つまり真劔勝負じゃない、その心持おんと似た事だ。こんな風だから、他人は作をしていねば生活が無意味だというが、私は作をしていれば無意味だ、して居らんと大に有意味なる。この相違を来すにや何か相当の原因が無くばなるまい。

私は二十世紀の文明は皆みんなな無意義になるんじゃないかと思う。何と云つても今はまだレフレクションの影響を免がれていない。

十九世紀で暴威を逞くした思索の奴隷になつていたんで、それをいよいよ脱却する機会に近づいているらしく見える。新理想とか何とか云い出すな、まだレフレクションに捉われてる証拠さ。併し



さすがに以前の理想では満足出来ん所から、新理想主義になつて来たんだ。文学の方で最近の傾向はシンボリズムとか、ミスチシズムとか云うのだが、イズムの中に彷徨うろついてる間うちや未だ駄目だね。象徴主義で云う霊肉一致も思想だけで、真実一致はして居らんじやないか。で、私は露語の所謂ストリヤツフヌスト（身震いする）と云つたような時代……つまりこびり着いて居る思想の血を払つて、新たな清い生活に入ろうとする過渡の時代のように今を思う。思想じゃ人生の意義は解らんという結論までにや疾くに達して行くくせに、まだまだ思想に未練を残して、やはり其から蟬脱することが出来ずに居るのが今の有様だ。文学が精神的の人物の活動だというのが、その「精神」が何となく有り難く見えるのは、その

余弊を受けて居るんで、靈肉一致どころじゃない、よほど靈が勝まさつてる証拠だ。だからシンボリストでも、思想では靈肉一致だろうが自分の存在では未だ其処までは行つて居らんよ。そんなら行き着いた先きは何うなるかと云うに、そりや想像は一寸付かん。第二義から第一義に行つて靈も肉も無い……文学が高尚でも何でも無くなる境涯に入れば儲さてどうなるかと云うに、それは私だけにや大概の見当は付いているようにも思われるが、ま、ま、殆ど想像が出来んと云つて可いいな。——ただ何だか遠方の地平線に薄ぼんやりとあかるく夜よが明けかかっているような所が見えるばかりだ。

アンノーン  
未 知 の 神、  
未 知 の 幸 福  
ゴット、  
アンノーン  
ハッピーネス  
——これは象徴派シムボリストのよく

口にする所だが、あすこいらは私と同じ傾向に来て居るんじゃないかと思うね。併し彼等はまるで今迄とは性質の変った思いもかけぬ神様や幸福が先きにあるように考えてるらしいが、私はそうは思わん。我々が斯うして生きてるのは即ち「アンノーン、ハツピネス」じゃないか。ただ気が付かずに迷つてるだけだ。聖人は赤児の如しという言葉が、其に幾らか似た事情で、かねて成り度いと望んでた聖人に<sup>いよいよ</sup>弥々成つて見れば、やはり子供の心持に還る。これ變つたと云えば大に變り、變らんと云えば大に變らん所じゃないか。だから先きへばかり眼を向けるのが<sup>そもそも</sup>抑の迷い。偶に<sup>たま</sup>は足許も見ては何<sup>ど</sup>うか。すると「いや、此儘で幸福だ」というような事がありはせんか、と、まア思うんだな。

私は何も仏ほとけを信じてる訳じゃないが、禅で悟を開くとか、見けんし性ようじようぶつ成ちやうじやうぶつ仏ぶつとかいった趣うちきが心の中うちには有る。そんなら今が幸福だと満足して、此上に社会改良も何も不必要かと云うに然うでもない、大變パラドクサルになつて了つて……ある意味じゃ此儘幸福だが、他の意味じゃ不幸福だ。一見矛盾しているようだが私の心では為して居らん。ここが象シムボリスト徴派と同じ所へ来ている証拠しやうこじゃないかと思う。だから人が文学や哲学を難ありがた有あがるのは余程後うそれれていやせんかと考えられる。第一其等が有難いと云うな、偽うその有あ難がたいんだ。何となれば、文学哲学の価値を一旦根底から疑つて掛らんけりや、眞の価値は解らんじやないか。ところが日本の文学の発達を考えて見るに果してそう云うモーメントが有つたか、有

るまい。今の文学者なご殊に、西洋の影響を受けていきなり文学は有難いものとして担ぎ廻つて居る。これじゃ未だ未だ途中だ。

何にしても、文学を尊ぶ氣風を一旦壊して見るんだね。すると其

ルーインズ

敗滅の上に築かれて来る文学に対する態度は「文学も悪くは

ないな！」ぐらいな処とこになる。心持ちは第一義に居ても、人間の

行為は第二義になつて現われるんだから、ま、文学でも仕方がない  
いと云うように、価値が定きまつて来るんじゃないかと思う。

一寸親子の愛情に譬えて見れば、自分の児は他所よその児より賢く  
て行儀いが可いと云う心持ちは、濁つて垢抜けのしない心持ちである。  
然るに垢抜けのした精リファインド美インドされた心持ちで考えると、自分

の児は可愛いには違ひないが、欠点も仲々ある、どうしても他所

の兎の方が可い、併し可愛いとなる。これと同じ事で、文学にしがみ付いて、其でなきや夜も日も明けぬと云うな、真に文学を愛するもんじやないね。今の文学者が文学に対する態度は真面目になつたと云うが、真面目じゃなくて熱心になつただけだろう。法華信者が偏頗心へんぱんで法華に執着する熱心、碁客が碁に対する凝り方そんなのと同様で、自分の存在は九分九厘は遊んでいるのさ。真面目と云うならば、今迄の文学を破壊する心が、一度はどうしても出て来なくちやならん。

だから私の態度は……私は到底文学者じゃない。併し文学が兎戯に類すると云う話と、今の話は別だよ。ただ批評をして見ると、一寸そんな事を云って見度くなるのだね。

私は、まあ、スケプチスト懷疑派だ。第一論理ロジックという事が馬鹿々々しい。  
ローオブソート思想之法則は人間の頭に上る思想をアドジャスト整理するだけで、其が人間リヤルライフの眞生活とどれだけの関係があるか。心理学上、人間は思想だけじゃない。メンタルエナジー精神活動力の現われ方には情もあれば知もあり意もある。それを思想だけ整理しても駄目じゃないか。成程、相等しき物は同一なりは尤もの次第で、他に考えようもないが、併し「何故」ホワイという觀念が出て来ると、私はそれに依頼されなくなる。心理学上のコンシアスネス識覚について云つて見ても、識覚に上らぬ働き(アンダー、コンシアス、ウオーク)が幾らあるか知れぬ。レフレクチブアクション反射的動作などは其卑近の一例で、斯んな心持ちがする：  
 …云々と云う事も亦其働きた。だから識覚の上へのぼつて来る思

想だけじゃ、到底人間全体の型は付けられない。じゃ、何うすりや好いかと云うに、矢張りそりや解らんよ。ただ手探りでやつて見るんだ。要するに人間生きてる以上は思想を使うけれども、それは便宜の為に使うばかり。と云う考えだから、私の主義は思想の為の思想でもなけりや芸術の為の芸術でもなく、また科学の為の科学でもない。人生の為の思想、人生の為の芸術、<sup>は</sup>将た人生の為の科学なのだ。

人生、<sup>ライフ</sup>々々《ライフ》というが、人生た一体何だ。一個の<sup>ノイシ</sup>想念<sup>ヨン</sup>じゃないか。今の文学者連中に聞き度いのは、よく人生に触れなきや不可<sup>いかん</sup>と云う、其人生だ。作物を読んで、こりや何となく身に浸みるとか、こりや何となく急所に当らぬとかの区別はある。



併しそれが直ちに人生に触れる触れぬの標準となるんなら、大變  
輕卒のわけじゃないか。引緊つた感を起させる、起させぬの別と、  
人生に触れる、触れぬとの間にや大なるギャップが有りやせんか。  
私はどうも那樣そんな気がするね。触れる云々は形容詞に過ぎんように  
思う。哲学上の見解から小説と人生との接触を見たんではないら  
しい。にも係かかわらず其無意味のことに意味をつけて、やれ触れたの、  
やれ人生の真髓は斯うだのと云う。一片の形容詞が何時の間にか  
人生觀と早變りをするのは、これ何とも以て不思議の至りさ。  
いや、何時のまにか私も大氣焰を吐いて了つて。先ずここらで  
御免を蒙ろう。

(明治四十一年二月「文章世界」)



# 青空文庫情報

底本：「平凡・私は懷疑派だ」講談社文芸文庫、講談社

1997（平成9）年12月10日第1刷発行

底本の親本：「二葉亭四迷全集 第一、二、三、四、七卷」筑摩書房

1984（昭和59）年11月～1991（平成3）年11月

入力：長住由生

校正：もりみつじゅんじ

2000年5月4日公開

2006年3月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 私は懷疑派だ

## 二葉亭四迷

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>